

雲崎町、加茂市、村松町などに隔離して分布し、ユキツバキとしばしば共存している。カジカエデは太平洋側に分布しているが、県内では3地点ほど生育が確認されており、2地点ではユキツバキと共存している。従ってチドリノキ、カジカエデをこの類型とは別に区分する方が妥当かもしれない。

4) ユキツバキ分布圏に広く分布する種

ユキツバキの分布圏に広くみられる種としてウリハダカエデ、ヒトツバカエデ、コハウチワカエデ、ハウチワカエデがあげられる。ヒトツバカエデは他の3種よりは分布地点が少ないが、広域に生育している。

垂直分布からみた類型 (主に高所に分布している種)

1) ユキツバキ分布圏外に分布する種

オガラバナ、ナンゴクミネカエデは亜高山帯から高山

帯に分布しているため、低山帯に分布しているユキツバキとは分布域を異にしている。

2) ユキツバキ分布圏に接在する種

ミネカエデは亜高山帯から高山帯に分布しているが、しばしば低山帯上部にも生育しているため、ユキツバキの上限付近で共存していることがある。

3) ユキツバキ分布圏にも分布する種

コミネカエデ、テツカエデは低山帯から亜高山帯にかけて分布しているため、ユキツバキとは共存していることがある。しかし、広域にわたってユキツバキと共存していない。

本文の内容は、主に植物保護30号(2001)に掲載したものであるが、一部追加して再録したものである。

上越市浦川原区のカエデ

五百川 裕

新潟県上越市浦川原区霧ヶ岳において、県内では稀産のカジカエデ *Acer diabolicum* Blume ex K.Koch (図1)の生育を確認したので報告する。カジカエデは、日本固有種で、本州、四国、九州に産し、関東西部及び東海地方の山間部に最も分布密度が高く(尾崎2000)、太平洋側の北限は宮城県である(Ogata 1999, 宮城植物の会 2001)。新潟県においては、十日町市松之山兎口、および糸魚川市来梅沢と頭山に分布が記録されているのみであり(丸山1982, 尾崎2000)、十日町の生育地が日本海側の北限とされる(尾崎2000)。

上越市浦川原区霧ヶ岳のカジカエデは、今年(2005年)10月22日に同地において開催された理友会研修会(上越地域の理科教員の研修会)の場で、同会会長の山本敬一氏が発見されたものを、同行していた著者に質問されたことから確認されたものである。生育地は、霧ヶ岳北麓の温泉施設裏にある北に開いた小谷の東側斜面の下部に位置する。この小谷には霧ヶ岳に登る遊歩道が作られており、それに沿って谷底には植栽と思われるオニグルミの大木が数本並んで生え、湿った林床には、ミゾソバ、ウワバミソウ、アカソ、カメバヒキオコシ、サラシナショウマ、フッキソウなどが群落をなして生育している。やや傾斜が急な東側斜面は、ハイイヌガヤ、マルバマンサク、ユキツバキ、ヤマグワ、ミヤマハウソ、ケキブシなどの低木林となっているが、カジカエデは、それらの低木層から抜き出るように高さ5m以上の成木が5本ほど生育しており、実生と思われる幼木も数本みられた。成木の幹基部の直径は15~20cm

あるが、いずれも幹基部が斜面下部方向に倒伏した後に立ち上がって直立しており(図2)、倒伏部で分枝した複数の幹が並立して樹冠を形成している。樹冠が絡み付いたクズによって被われた個体もあったが、生育状態は概ね良好のようであった。カジカエデは雌雄異株であり、今回の調査では果実を付けた個体は見られなかったものの、実生とみられる幼木があったことから、成木の中には雌株、雄株ともに含まれている可能性が高いものと思われる。

この生育地は、松之山兎口の産地の北西約12kmに位置しており、共に日本海側の北限産地をなすものとして注目される。周辺地域にはまだ他にも生育地がある可能性があり、県内稀産種であるカジカエデの分布制限要因を明らかにする上でも、さらなる調査が期待される。この生育地も山本敬一氏の指摘が無ければ見過ごされていたはずであり、山本氏の鋭敏な観察力に敬意を表す。

この報告を記すにあたり、長年にわたって新潟県におけるカエデ属植物の分布と生態を調査された尾崎富衛先生的情熱と多くの貴重な成果に敬意を表すると共に、慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

文 献

- 尾崎富衛(2000) カジカエデ 新潟県植物分布図集 20: 36-38.
宮城植物の会・宮城県植物誌編集委員会(2001) 宮城県植物目録2000. 378pp.
Ogata,K.(1999) Aceraceae. Iwatsuki,K., Boufford,D.E.



図1. 上越市浦川原区のカジカエデ



図2. 幹基部は斜面下部方向に倒伏している